

兵庫津遺跡第62次調査

2014.10.25
第二回現地説明会資料
神戸市教育委員会

はじめに

古代から、国内でも有数の港町として栄えていた兵庫津に城が築かれたのは、今から430年ほど前のことです。その少し前、摂津国を治めていた荒木村重が主君の織田信長に反旗を翻します。このため信長の命を受けた池田恒興は荒木方の花熊城を落とし、兵庫津もその一部が焼失しました。

その後、兵庫津を支配した池田恒興は花熊城の部材を再利用して兵庫津に城を築きます。1580年、兵庫城と周辺の近世都市の整備がここに始まります。池田恒興はその3年後に岐阜城に移り、その後兵庫城の主は豊臣秀次、片桐且元へと引き継がれます。慶長伏見の大地震の被害を受けるものの、兵庫城とその城下町の整備は進められました。

今回の現地説明会では、兵庫城築城期の城下町の跡や、1769年に兵庫城の堀が埋め立てられ町屋が拡大した時に作られた石組水路を公開します。

石組水路の調査

1769年、江戸時代も後半に入った頃、兵庫津は幕府の直轄領となりました。この時、それまで兵庫津支

配の機関である兵庫陣屋の敷地を半減して「勤番所」としました。それに伴い兵庫城の堀も幅2間分(約3.6m)を残して埋められました。埋め立てや勤番所敷地の半減で生まれた土地は、町方に払い下げられ、町屋や畑地として利用されたようです。

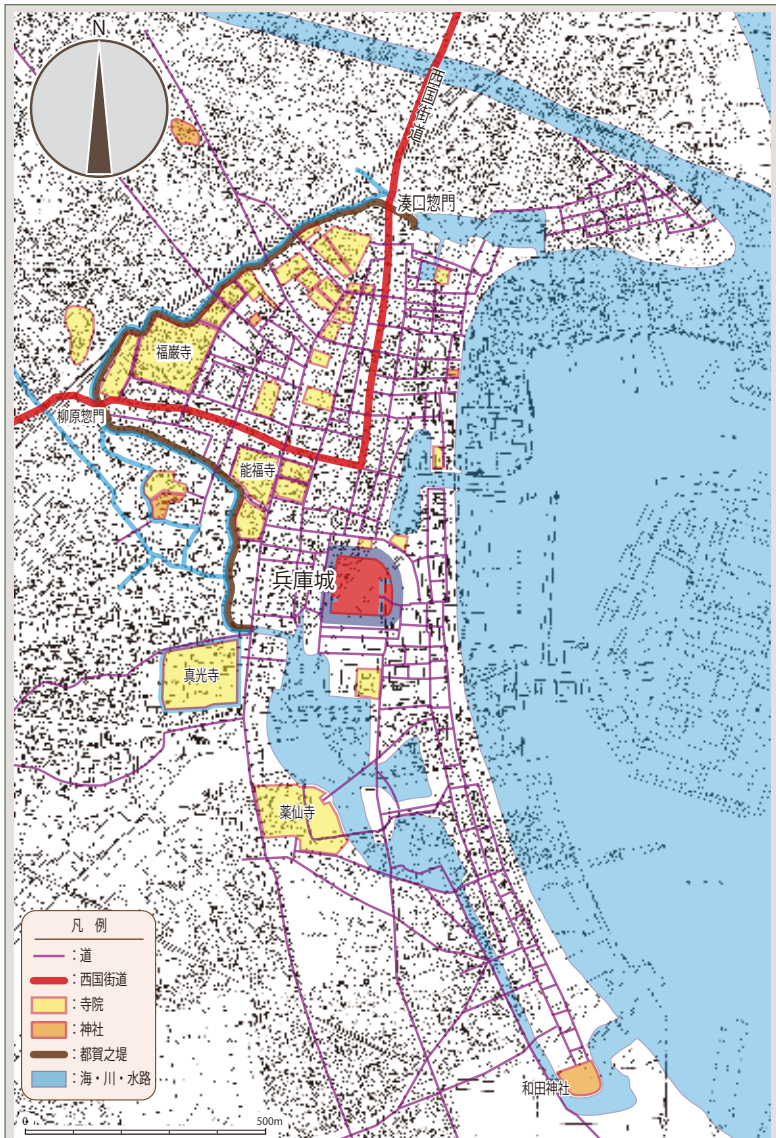
天保9年(1838)に作成された土地台帳である水帳あくすいぬきみぞ絵図には堀の名残の溝のことを「悪水抜溝」と記載されています。発掘調査では、この溝がその後も規模を縮小しながら最終的には幅30cmほどの溝として利用され続けたことがわかりました。



兵庫津遺跡 - 兵庫城跡 - 発掘調査地点位置図

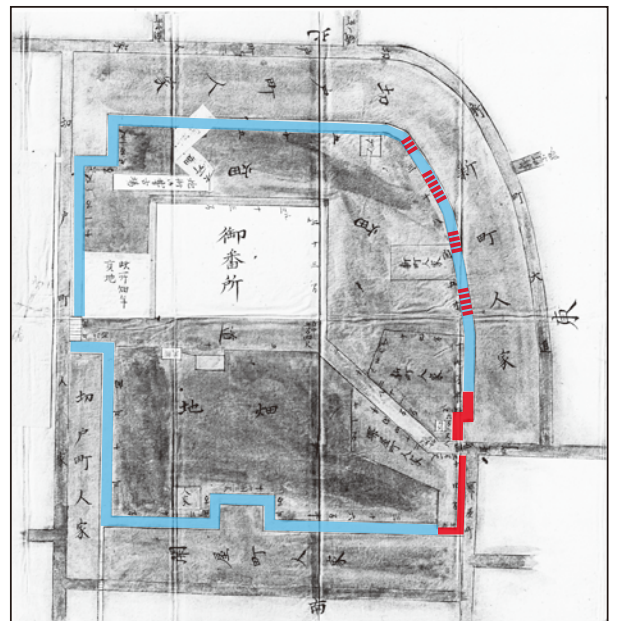


空から見た発掘調査地とその周辺



現在の地図と元禄絵図の合成図

元禄9（1696）年に兵庫津奉行が尼崎藩に提出した「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」を、現存する寺院などを基準に、現在の地図と重ね合わせました。



天保頃に作成された絵図の水路(悪水抜溝は着色加工)

兵庫城年表

年号	西暦	出来事
天正8	1580	池田恒興が築城。荒木村重の花熊城を解体し、その材料を使用したとの記録がある（『花熊落城記』1732年）。
天正11	1583	池田恒興、美濃へ転封。兵庫と尼崎が三好（豊臣）秀次に与えられる。
天正13	1585	羽柴秀吉の直轄領となる。片桐且元が代官となり、「片桐陣屋」と呼ばれる。
慶長元	1596	慶長伏見地震。兵庫津も被害を受ける。
元和3	1617	尼崎藩領となる。「兵庫陣屋」がおかれ、奉行が駐在する。
元禄9	1696	『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』が描かれる。「兵庫陣屋」は、「御屋敷」と表現される。
明和6	1769	幕府直轄領となり、「勤番所」が置かれる。上知（あげち）以降、堀が埋められ町屋となる。
文久2	1862	『兵庫津之圖』が描かれる。「御番所」の周りも町屋となっている。
明治元	1868	兵庫県庁が置かれる。4ヶ月で移転する。
明治7	1874	新川運河開削により、中心部の大半が削られる。



発掘調査範囲と摂州八部郡福原庄兵庫津絵図(部分、個人蔵、神戸市立博物館寄託) (不許転載)



悪水抜溝

悪水抜溝

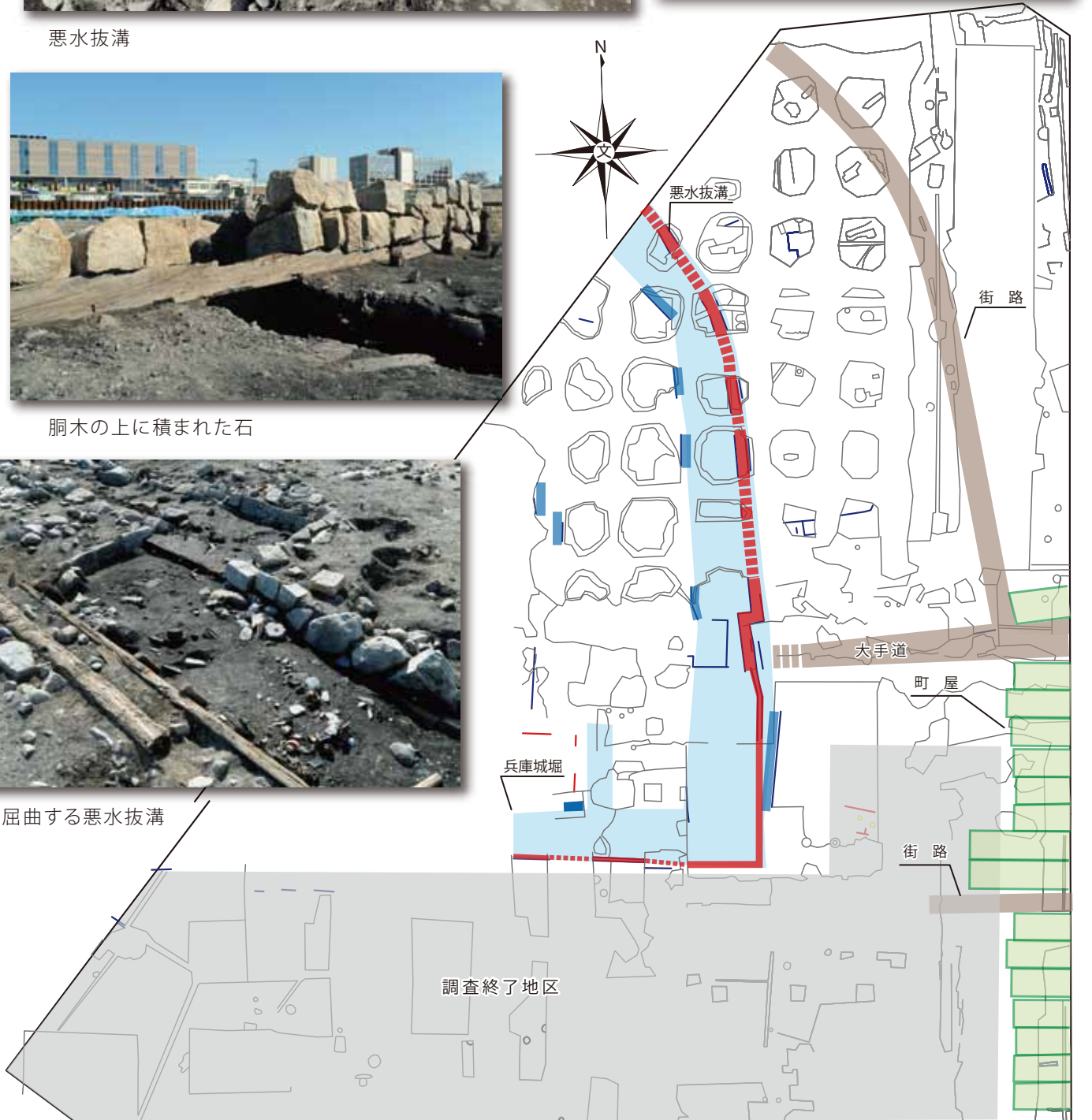
調査で石組みの溝が見つかりました。兵庫城の堀は最大幅8間(約14.4m)、平均して6間(10.8m)ほどの規模でしたが、1769年に幕府の直轄領になった折に2間分を残して埋め立てられ、その後さらに半分程度が埋め立てられています。見つかったのはこの溝で、幅40cm程の切り石を胴木(基盤となる材)の上に積み上げ、漆喰で丁寧に隙間を埋めています。溝の幅は2.3m、深さは90cm程が見つかりましたが、本来はもう少し上に石が積まれていたと思われます。



胴木の上に積まれた石



屈曲する悪水抜溝



検出遺構配置図

0 100m

町屋の調査

江戸時代を通じて、何度も火災に遭いながらも同じ区画を踏襲して町屋が営まれていたことがこれまでの調査で明らかになってきました。しかしながら、兵庫城が築かれた頃の城下町の様子は、明らかにはなっていませんでした。

今回、調査が進む中で、築城後まもなく町屋の区画ができていたことが明らかになりました。町屋の建物構造もその後と大きな隔たりはなく、間口が狭く、奥行きが細長いもので、土間と床の部分が2分割されるものでした。出土陶磁器には中国製のものも含まれ、生活水準の高さを物語っています。



焼けた町屋（17世紀初頭）



礎石に使用された五輪塔など（16世紀末）

城下町の遺構

大手道より南で見つかった町屋群は、南北の街路に表口を並べて軒を連ねています。これらの建物は、兵庫築城頃の城下町を構成する建物群で、15棟を確認しました。それ以後、1軒1軒の敷地や間取りなどは、ほぼ同じ形状で幕末まで続くことが明らかになりました。



見つかった町屋群（16世紀末）



町屋の跡（16世紀末）



敷地と街路の境に並べられた五輪塔の列（17世紀初頭）